

浄土

12
1994

がんの告知と Telling the Truth to Cancer Patients 種村健二郎

旅

酒どころ越後の銘醸を訪ねる 夏 攸吾

好評連載

吉川英明 関 容子

稲葉小太郎 須藤隆仙

「インフォームド・コンセント」というけれど 中村 尚



法然上人鑽仰会発行

は
じ
め
に
押
し
て
ね、
0
0
8
8。



ゼロゼロ押したら ハッピー ハッピー

0088

日本を楽しくする電話

お申し込み・お問い合わせはお客様センターへどうぞ。

☎0088-82 (無料) / ☎0120-0088-82 (無料)

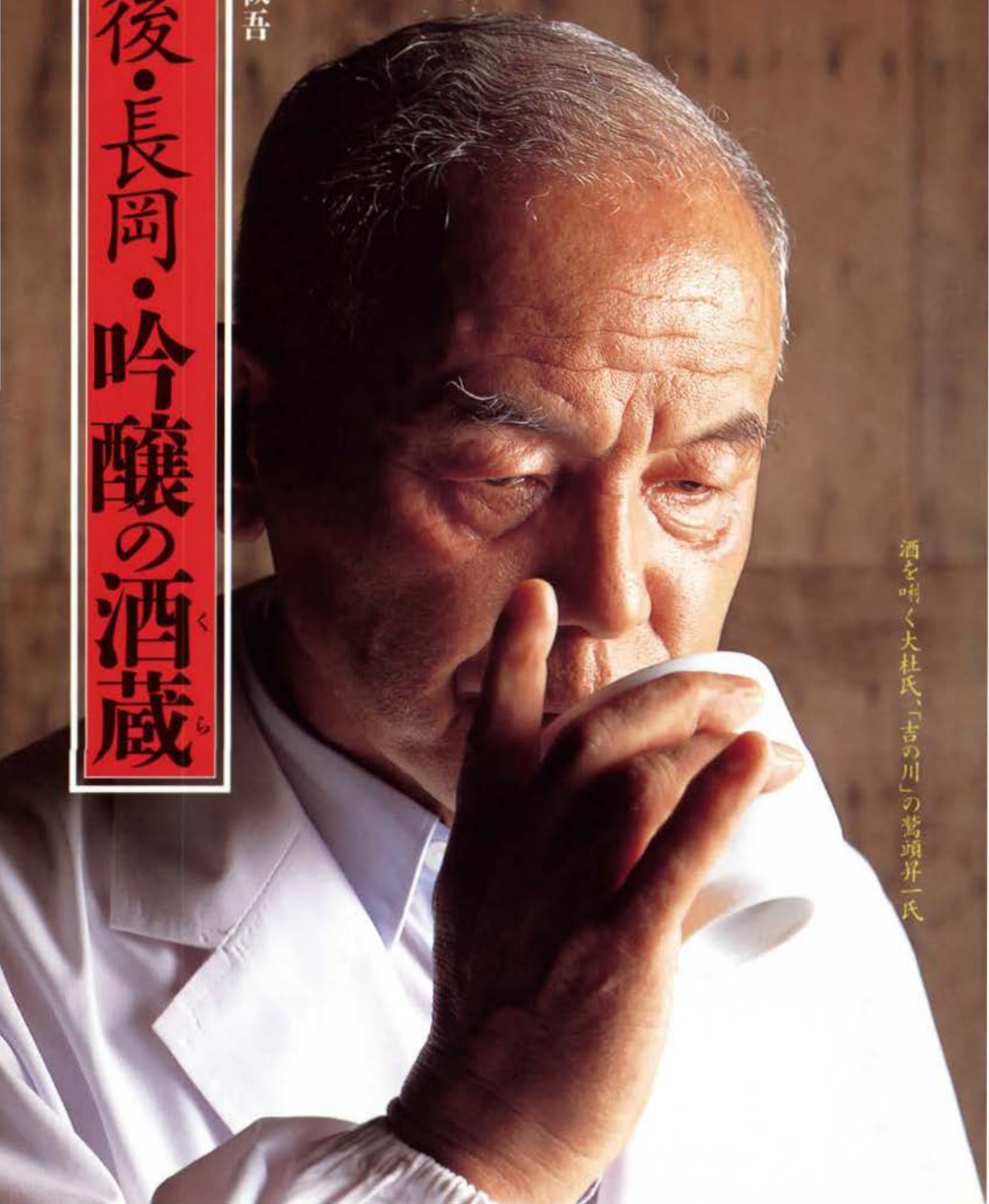
■受付時間 9:00~23:00 (年中無休)

0088なら●月々の基本料金は一切かかりません。●使用になった通話料金
だけのお支払いです。●かけ方は簡単。現在お使いの電話機で、市外局番
の前に*0088*を押すだけ。●60kmを超える市外電話は0088がおトク。

越後・長岡・吟醸の酒蔵

写真 夏 攸吾

酒を嗜く大杜氏、「吉の川」の鶯頭昇一氏





吟醸の米を蒸す



洗われた米パールホワイト



玄米と50%に精米された米



麹釜に寝かされた吟醸麹



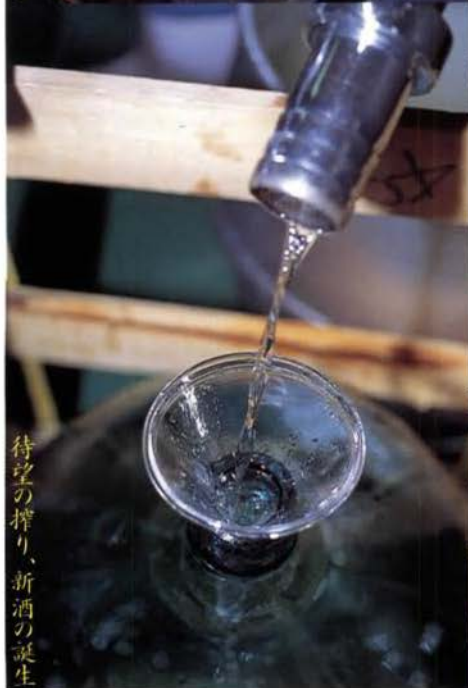
蒸米の出来を確かめる「云ねり餅」



洗米は秒単位の仕事



麴の育ちを細く見る大杜氏



待望の搾り、新酒の誕生



米が水に溶けていく……醗の仕込み



夏の夜空を彩る花火、長岡まつり

浄土



1994/12月号 目次

〔カラー口絵〕越後長岡・吟醸の酒蔵……写真＝夏 攸吾	3
がんの告知と Telling the Truth to Cancer Patients ……種村健二郎	8
酒どころ越後の銘醸を訪ねる ……夏 攸吾	16
午後の日差しの中で——①	
偽善とエゴ ……吉川英明	26
楽屋ゆかた——③	
中村吉之丞(三) ……関 容子	34
現代の快僧——その10	
世界の宗教が ³ 出会うとき ……稲葉小太郎	42
念仏信仰の系譜—中国編—⑤ ……須藤隆仙	54
「インフォームド・コンセント」というけれど…中村 尚	62
編集後記 ……	70

表紙題字—浄土門主 中村康隆貌下
表紙撮影—松本立夫
目次・編集後記イラストレーション—田村直巳

がんの告知と Telling the Truth to Cancer Patients

種村健二郎



がん告知

「本人に病気の事がわからないようにしようと家族で話し合い、毎日を不安のない病院生活をさせてあげようと励んで参りました。本人も家族に気を遣っていたのがわかりました。後悔しないというウソになりますが、やはり家族の協力で精一杯尽くす事だと思えます。主人は幸

福者だと思いました」と、夫を看取った妻がいう。また、別の人は「第一回目の手術をし、百二日間入院して元気になられた時点で、がんであることを本人に知らせ、亡くなるまでの一年間は、仕事の事（自営業）を色々話し合い、今引き継いですることが出来、知らせて良かったと思います。あまり苦労しませんでした」という。このような家族の言葉が載せられている『働

き盛りのがん死」という本が、厚生省大臣官房統計情報部から今年の七月に出されました。患者の家族の「告知」に対する関心は、非常に高いといえます。しかし、この「がん告知」は、長く話題にされているにもかかわらず、「告知して良かった」「告知せずに幸せだった」という感想のみで、「がんを告げることとは何なのか」が語られていない。それは、「がんを告げる」ことが、患者さんやその家族、そして医師や看護婦という医療者を含む特定の小さなグループの問題としてのみ考えられるためだと思うのです。

「がん告知」は誰のため

「告知」についてのアンケート調査結果では、だいたい「家族には告げたくない」が「自分ががんに罹^{かか}つたら告げて欲しい」となる。がんは、

昭和二十五年ころまでは稀な病気でしたが、その後、急に患者さんの数が増え、最近では四人いますとその二人ががんとなり、その一人が死ぬと思つてよいほどの病気、即ち、非常に多くが患者さんとなり、そして、亡くなられる病気となったのです。そのため、「自分ががん罹^{かか}つたら告げて欲しい」のであれば、他の人の場合にも同じように考えて欲しい、と告知することを勧める人もいます。例えば、患者さんの幸せのために告知することはやめようと決めた家族が、一生懸命に「患者のために」と嘘をつき通したとします。患者さんは幸せに亡くなられました。その後、患者さんを看護した家族の一人ががんに罹^{かか}りました。そんなことは珍しくありません。その人は、自分はウソをついたけれど、自分には本当のことを話してくれると思えますか。また、たとえ真実が伝えられても、それを信ずる

ことが出来ないのではないかと思います。

昭和四十七年、私が勤務し始めたころは「がん告知は行なってはならない」とされていました。西洋の諺に「神は医者^{こゝろざし}に患者の数だけの嘘を許された」とありますが、病棟の中が嘘だらけでした。ウソだらけと言いますと何か出鱈目な雰囲気^{ふんいき}を思い浮かべるかもしれませんが、「患者さんのための正しい嘘」によって神々しい使命感に溢れていました。嘘をつくことが出来ずに泣き出しそうだった新卒の看護婦さんは、二、三年すると、亡くなられそうな患者さんに「もうすぐ良くなりますよ」と優しく話すことが出来るようになりました。しかし、患者さんとの本当の話はなくなりました。そして、知らず知らずに、それも、人のために正しいことをしていると思っている間に、人を信ずるころを失ってしまいました。このことは、家族も同じです。

医者である私たちも同じです。今でも私たちは嘘を大切にしています。しかし、たまたまがんの患者さんを看護することとなり、患者さんのために行なった嘘から、人を信ずるころが失われていったのです。

嘘の価値

昭和四十四年、新潟で癌治療学会がありました。欧米で行なわれ始めた「がん告知」が日本でも無視することが出来なくなつたのです。当時の国立がんセンター総長は久留勝先生でした。著書からは人道主義的立場のすばらしい人と思えます。彼は「癌患者にその癌を知らしむべきか」というシンポジウムの中で「申すまでもなく癒る見込みのない癌患者に『あなたは癌だ』と宣告を下すのは百害あつて一利ありますまい」と話されました。この時に、禅の高僧でも告知

を受けて食事が喉を通らなくなり、たちまち息絶えたことが話されたのが今に伝えられ、この学会の発言は大きな影響があり、以降の「がん告知」は禁じられたのです。この中で、がん告知は「癌患者に癌を知らせる宣告」としています。

英語では普通「Telling the Truth to Cancer Patients」というようです。「がん患者さんに真実を話すこと」が告知とされ、「がん患者さんにかんを話すこと」とは理解されていないようです。「真実を話す」「がんを話す」、この相違が理解されていないことが、「がん告知」の基本とする同意の論議のなされない理由と思います。一般的には、私たちは「がんを話すこと」としておりますので、「がん告知」を患者さん、家族、医師、看護婦の小さなグループの問題と考えられています。が、「真実を話すこと」にしますと、その社会を形成するすべての人々の

コンセンサスの問題となるでしょう。

説明と同意

最近、「がん告知」を勧める医師が多くなりました。良いことでも悪いことでもありません。一九九〇年一月、日本医師会・生命倫理懇談会は、臓器移植、高度な手術、臨床試験、ガン告知などに対して「医師は患者にわかりやすい言葉で、病状、治療方法、治療後の成績などについて説明することを習慣化すべきだ」と報告しました。即ち、「説明と同意」です。医療に対する社会的要求は、治療成績を向上させる新しい技術、新しい薬です。新しいことを行なうためには臨床試験が必要となります。厚生省は、臨床試験での「説明と同意」が患者と医師の間で確実に行なわれることを厳しく義務づけました。そこで、がん治療の臨床試験データをとるため

には「説明と同意」が必要となり、そのなかでがん告知が行なわれるようになったのです。国立

がんセンター中央病院の医師へのアンケート調査では、病名告知賛成の割合は一九八七年二十五%でしたが、一九九三年には六十一%になり、賛成の割合の急上昇がわかります。しかも、治癒不能の患者さんへの病名告知も五十一%という高い割合で行なわれ始めました。しかし、予後告知賛成の割合は三十九%です。病名告知を受けた患者さんの割合は、臨床試験がなされる場合にはもっと高くなり、一般的には、病名は本当のことを話し、予後については嘘を混ぜて話そうと考えられているようです。嘘を適当に混ぜて説明することは実際に行なわれていることです。しかし、1%の嘘を混ぜた説明はすべて嘘なのです。ですから、私達が今行ないつつある「がん告知」は、「嘘の価値」を認めた中の「が

ん告知」だと思っています。それが広がり始めていると思うのです。

真実を告げる

一方、「がん告知は真実を告げること」と語る医師も出ました。「真実」という言葉は、すばらしい響きをもっています。そうしますと、がんの患者さんに真実を告げると、「早期の患者さんは積極的に治療に協力し、末期の患者さんは残り少ない余命を知って有意義な人生を過ごし、安らかに亡くなられる」ような錯覚に陥ります。真実を告げて、そんなことがあったら、誰でも「がん告知」をします。「真実を告げること」は、「嘘を告げること」と同じように苦しみを伴うのです。その苦悩の内容が、真実を告げたときと嘘を告げたときでは違うだけなのです。そして、今、「真実を告げる」ことの意



味を考えるとときだと思うのです。

「神は医者には患者の数だけの嘘を許された」という言葉の裏には、「神は僧に嘘を許されなかった」があると思うのです。私たちの国でも同じことだと思えます。真実を告げる苦しみを、僧は医療者より深く経験していると思うのです。

そして、嬉しいことには、亡くなられる患者さんへの全人的ケアの問題に積極的に参加しようとする僧侶が現れてきたことです。

ある会で告知について講演しました。僧侶の方が立たれて、

「私はお見舞いをしてお話するボランティアをしています。僧侶である私がお見舞いするときに、何か自分に要望することはありませんか」と質問されました。そこで、

「いつもと同じようにお話して欲しいです」と答えました。「講話の中でいつも僧侶の方は『生まれて来た人は必ず死ぬ』と話されます。

同じようにと言いますのは、お見舞いに行った患者さんが、がんの患者さんであつても、すぐに亡くなられそうな状態の患者さんであつても、同じように『生まれて来た人は必ず死ぬ』とお話してくださいということです」と加えました。

真実を告げることは、辛いことです。すばらしいことではありません。しかし、患者さんは、特に病の重くなった人は、真実を話してくれる人をいつまでも待っているのです。

人間大好き

あるがんの患者の集まりでお話しました。終わって患者さんに、

「先日、がんが再発したと説明されました。再発したらどうなりますか」と質問されました。

私はいつもと同じように、

「再発したら死にます」と答えたのです。そんな問答をしていましたら、「あの先生は酷いことを言う。再発した患者さんに死ぬという」と話されているのを聞いたのです。

「再発したって治ることがあるでしょう」

「ええ、治ることもあります」

「だったら、死ぬなんて言わないで欲しい」

「そうですね。でも、『治りますよ』と話した後では、病状のだんだん重くなる患者さんのそばには行けなくなります。足が遠退いてしまいます。『死にますよ』と話した患者さんが治って、『先生、死ぬって言ったじゃない』といつても、『たまさかやり残した仕事が少しあっただけ』『いつでも亡くなられます』と話せます。病気が治るのは、患者さんが一生懸命頑張ったからでも、名医が治療した結果でもない。私たちに出来ることは、結果はどうあろうとも、それぞれの立場でベストを尽くすことだ。ベストを尽くして望む結果が得られないときも、得られたときも、同じようにその人と一緒にいたいのです。健康だから、がんが治ったからすばらしいのではないのです。すばらしいのはその人なのです」

「死は自然である」ことをそのまま伝えるのは、苦しく辛いことです。そのため、「人生では、何が最も大切なのか」を話し合うことが「死は自然である」を伝え合うことといえます。そして、死を知った患者さんは、ひとりひとりがかげがえのない大切さを伝えてくれます。

子宮頸癌のある患者さんは、大きな手術をしました。膣も肛門も膀胱も、外陰部さえもなくなりました。何もかもなくなりました。そして、人工肛門と人工膀胱が腹につけられました。手術のあとで離婚しました。夫のことで泣きました。身体のことでも泣きました。泣いて、泣いて、泣いてばかりいました。今、孫たちの賄いをして生活している、そんな彼女が書いてきました。「お腹から用をたすようになって丸四年と半分を過ごして来ました。今ではこの二個の袋が可愛くてなりません。掃除、洗濯、ご飯のことに

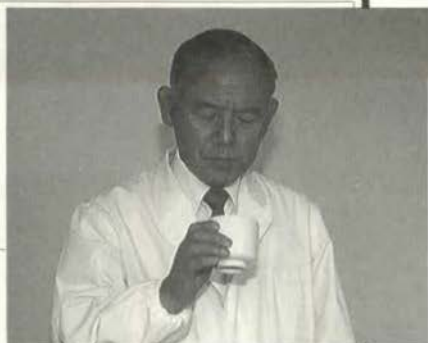
気を入れ過ぎると大変疲れるけど、障害者だと思わずに年のせいにしていきます。いたわり、励まし合えるところからの友を得て幸せです」

彼女は七十歳になりました。また、卵巣癌の末期の患者さんは、他の病院で手術し、ここでも手術して抗癌剤を加え、そして、治療を止めた。

「先生、今年の春ね、トオモロコシ植えたんだ。私が死んでも家族が思い出しながら食べてくれるかなって思ってたね。そしたら、自分が食べられたじゃない。美味しくってね。うれしくなっちゃった」と腹水で膨らんだ患者さんが目を輝かせて話す。

何の変化のない日常の出来事に大きな喜びを伝えてくれる。嫌がられても、辛くとも、真実を話すのは、身体に障害のある人だって、すぐに亡くなられる人だって、人間大好き。

(国立がんセンター婦人科医長)



酒どころ越後の 銘醸を訪ねる

文と写真—夏 攸吾

いのちの吟醸

その光景は、様式化された古典芸能、たとえば神楽か狂言でも見るようだった。

演者は男ふたり、装束は白。頭には深帽子、素肌には甚兵衛ふうの上っ張り、膝丈の猿股の腰にはキリッ^{はだし}と短い前垂れを締め、裸足にゴムの草履^{はだし}ばき。

手にするもの。ひとりは左手に曲げ木の篩^{ふるい}、右手に竹の篋^か、役どころはシテ「ふるい手」、もうひとりは右手に団扇^{うちやうせん}、こちらがワキ「あおぎ手」といったところ。向かい合って立ち、互いに氣息を調える。

鳴り物もなく、シンと閑かな舞台。やおら、シテが頭上やや前方に篩を構えれば、ワキは応じてそれを見上げ

蒸米を晒す



る形、左手を腰に、脚を開いて中腰の態勢をとる。

シテの手が動き、カツンと軽く竹筧が篩の下っ縁をたたく……と、篩の下空にモヤッと漂い出すものがある。

緑をおびた灰白の色淡い、微粉末のそれは「もやし」と呼ばれる種麴、吟醸用。京都嵐山にある日本第一酒造の神、松尾大社のお札付き。ついさっきまで、恭しく桐の箱に納まっていた。

つづいてワキの、団扇が篩の下を掬うようにして、斜め上方へと泳ぐ。揺り動かされた微かな気の流れにのって薄くたなびく霧の、ゆったりと下降していく先には、白い蒸米の床……。無言で見つめる男たちの、腰よりやや下

くらいの高さに広がっている。

一連の所作が済むと、シテ前進、ワキ後退の形で一步二歩、擦り足で位置を移動。そうして床のまわりをめぐるながら、同じ所作をくりかえしていく。

蒸米の畑に麴菌の種を蒔く、この「儀式」を「種付け」という。男たちがために目をかけ、手をかけ、気を配る酒造りの工程の、なかでも細心な「麴づくり」の一場面だ。

そこは、麴室。近代化された酒蔵の一郭に、貫禄の木造、古い館のようなこの一室だけが、分厚い二重扉で手厚く隔離されている。

これに先立って、大きな甕（蒸籠）で米を蒸す作業があった。できた蒸米

麴の成長を見守る大杜氏



は、荒熱をとって適温になるまで「晒し」てから、麴室に「引き込み」、大事に白布にくるんで「休ませ」ておいた。いったん待機してから、蒸米を広げ、五センチほどの厚さにならし、室温三十五度を超える麴室の中、蔵人たちの汗をしばる仕事のあとに、この儀式が待っていた……。

私は軽い眩暈^{めまい}を覚え、やがて解放されて廊下に出たとき、ブルツと体がふるえた。それは、窓の外に雪降りしきる二月の厳寒のせいではなく、（飲んべが酒に目覚めた瞬間）だったといっている。それまでの私、少なからず酒を軽んじて飲んでいたように思う。

「麴屋」と呼ばれるその場面の責任者

に尋ねたら、種付けは「米一粒に三つずつ」だと、こともなげな答え。そばで、総指揮とる大杜氏^{おおとうじ}が穏やかに笑う。実をいうと、私はこの大杜氏の笑顔に惚れた。極意は寡黙、信念もまた寡黙。饒舌を超えて、静かな微笑みのうちに端座する。

縁……を思う。たまたま誘われて訪ねた酒蔵に、その笑顔との邂逅^{であい}があった。からの付き合い、もうかれこれ十年にもなる。

最初はあれこれと質問をし、教わったのだが、そのうちに気分は取材の領域を抜け出し、すると、大杜氏の笑顔から何をつかみとるか、言葉ではなくなってきた。教わるより盗め、習う

山間の田植え風景、厳しい自然はほどよい米を育てる



より慣れろ……。そこで、期間は短くても心がけは「手伝い」の、体験を申し出たの蔵入り。おさなりの見学では、済ませたくなかった。

そこは、長岡市の郊外。米どころ酒

どころの越後、新潟を代表する酒蔵のひとつ、吉乃川。大杜氏は驚頭昇一。黄綬褒章受賞の、といえはさらに聞こえはよからうが、人の大きな勲章によるものでないことは、自身がよくわきまえておられるし、私もそんなところに惚れたんじゃない。

中越地方の中心、信濃川の流域平野に位置する長岡というところ。歴史的には、明治維新の戊辰戦争で会津藩とともに新政府軍と戦い、いちどは灰燼に帰した街だが、現在は新潟市に次ぐ県下第二の商工業都市。

見どころとしては、桜の名所の悠久山公園がある。また、八月に催される長岡まつりは、信濃川河畔の夜空を彩

春日山城跡の上杉謙信像
吉乃川の創業はこの時代に
さかのぼる



る大花火大会で有名。蓬平・成願寺な
どの温泉や、昔ながら市街に立つ五・
十の市でも知られるが、とりたてて観
光の街ではない。

東京からの上越新幹線が長岡駅にす
べりこむ少し手前、右側に見える吉乃
川酒蔵は、奇しくもあの上杉謙信が越
後の棟梁^がとなつて春日山城に入つた
天文十七年（一五四七）の創業。とい

つても、ほんとはそんなことどうでも
いいのかもしれない、酒の善し悪しは
何より飲んでみりやわかる……のなか
ら。

父が娘をいづくしむように

酒造りは水、と敢えて一番にいう。

いい酒は、限りなく水に近づき、きわ
めれば水を水に還したものだからだ。

酒蔵に入つて、まずそう思う。地味
だが、人も道具も、とにかくよく「清
め」ることから、酒造りは始まる。き
れいに清められた酒蔵から、すべての
美酒は生まれる。吉乃川の仕込み水は、
母なる信濃川の伏流水、自然の濾過装
置で磨かれた水が、酒を磨く。



長岡市、昔ながらの五・十の市

次に、酒造りは米。越後には五百万石という銘柄の酒造好適米があり、吟醸酒用にはこれを五十パーセント以上に「精米」したものが使われる。磨かれて石英に似た光沢の米は、何も知らない若い女性に、「ピアスにしたい」といわせるほどのもの。なかでも山間

高冷の地、津南産が格別よいという。

磨きあげた米をさらに美しく、研い

で水をふくませる「洗米」は、ストッ

プウォッチ片手の微妙な仕事。金環蝕

を想わせて水の染みこむ、限定吸水さ

れたあとの米粒には、パールホワイト

の輝きが宿る。

それから、「蒸米」。すでに述べた麴

づくりや、そのあとに控える酒母づく

り、醪を育てるのにもかかせない、こ

れも重要なポイントの仕事。蒸米は、

その弾力と香りと味わいを確かめるた

め、主任の「釜屋」が「ひねり餅」に

して、大杜氏の決裁を仰ぐ。

「昔はこんなふうだね……」と、釜屋

が別につくってくれたひねり餅は、み

ごとな男の逸物型。すすめられるまま

に輪切りにし、炙って食ったらオカシ

イくらいうまかった。

蒸米は、「飯溜」と呼ぶ桶に重量を

計りながら盛っては、飯台に運び、広

げて晒す。これなども手伝ってみれば

実に熱い仕事で、要するに、休めば冷

えるのが酒造りだった。

そこで第三に、酒造りは人。大杜氏を

酒母の仕込みに熱がこもる



はじめ蔵人たちは、愛娘をいつくしみ育む父親そのまま、黙々と働き、成長の節目折目に適切な手を差し延べる……。したがって、若い人と老練との差は、歴然だった。

「酒は寒造り」という。それは寒中を利用しての低温醗酵だからで、九月から明くる四月ころまでに醸造される。かつては季節労働だった蔵人たちも、ここ吉乃川ではいまは年間契約、自宅から通勤の体制になっている。

とはいえ、蔵がもつとも緊張する吟醸造りに入れば、全員が泊り込む。

きわめつけの「麴づくり」には、約五十時間。「種付け」のあと、攪拌の「切り返し」、木杵の麴蓋こうじぶたに寝かせる「盛

り」分けがあり、なお手入れの「仲仕事」から「仕舞仕事」までの間には、ほぼ三時間おきの「積み替え」も控えている。次の仕事までの間隔、経験でおよその見当はつくものの、麴は生き物、微妙に「破精はせい」の進みぐあい、つまり麴菌の育ち方が違う。昼も夜もない。

とくに吟醸の麴は「突破精つきはせい」といって、米粒の中にまで破精を進ませるのが特徴だ。

決断をする大杜氏は、あらゆる場で、手に掬い、色や姿を見、香りを嗅ぎ、味わい……五感を研ぎ澄まして、立ち向かう。中でも麴の様子をみると、拌むようにして両手に掬い、頬を

紅潮させて一心不乱の姿には、心を揺さぶるものがある。

そうして、ころあいよし、「出麴」

の合図は、あの穏やかな笑顔で頷く。

その鼻の頭に米麴の粒ひとつ……。

「酒母」の仕込みは、研究所で純粹培養された幾種類もの酵母の中から、最良と判断されたものが選ばれる。タンクに水と乳酸、麴と酵母、蒸米を入れて攪拌、酵母の繁殖によって酒母を熟成、二週間ほどでアルコール醱酵の主役の「酛」ができる。

酒母仕込みの主任が「酛屋」で、ちなみに釜屋・麴屋・酛屋を三役と呼ぶ。その上に杜氏の補佐役の「頭」がいる。この蔵で驚頭杜氏を「大杜氏」と呼ぶ

のは尊称であり、また副杜氏格の頭にも杜氏の力量が備わっていることをも示す。

「酛おろし」をして、いよいよ「醪」の仕込み。酒母に水と麴と蒸米を加える一日目が「添え」、二日目は休ませて醪の醱酵を促す「踊り」、三日目が水・麴・蒸米を追加する「仲」、さらに追加の四日目を「留め」といって、これがいわゆる「三段仕込み」。徐々に量をふやしていく。

醪の熟成に約一カ月。この間に、ふつふつ、アルコール醱酵と糖化醱酵とが同時に進む、世界に類をみない「並行復醱酵」。

とくに吟醸に欠かせない低温長期醱

酔のためには、雪国の自然もありがたい。大気を磨く雪が、「酒にも仕上げの磨きをかけてくれるようです」と、大杜氏はいう。

深夜、醪タンクに耳をおしあてると、「しゃー」と微かに、熟成する醪の息遣いが聞こえ……（生きてるんだ）、私は声もない。

「醪唼き」。蓋をとると、春風のようにふくやかな吟醸香漂わせる醪の、成熟を確かめ、「搾り」のときを決める。

蔵人こぞつて興奮をおさえきれない日、吟醸の搾りは昔ながらの「槽ふなしぼり」。酒袋に醪をとり、槽に積んで、ゆつくり時間をかけて搾る。息をつめて見守るうちに……槽口から泉のように

湧いて流れ出す清らかな酒……。思わず目頭が熱くなる。

できた「酒を唼く」。もちろん一番に大杜氏だが、皆、それぞれの想いを胸に酒を唼き、互いの顔見合わせて笑みこぼれる、このときの蔵人たち、まさに男冥利に尽きる。

搾られた酒、そのものが、初口の潑刺と若いのと、後口の熟れて練れたのと、刻々と味わいを変えるのも驚異だった。

大杜氏の唼き酒は、色を見、香りを嗅ぎ、口にふくんで嚙かんでころがして……入念をきわめる。しかも「造り」の最中のみならず、酒質管理の必要から年中休まずだ。唼き酒で飲むことはない、

日本第一酒造の神、京都嵐山の松尾大社には毎年新酒を奉納する。



「それでも酔いますから、最近はおだんの晩酌もなしです」という。

そんな大杜氏から「どれくらい飲みますか」と尋ねられ、私は遠慮して「二合くらい」と答えた。「毎日」、「はい」。

「酒豪ですね」、「……」。

読者諸兄の中にも、このときの私の心境いたいほどわかる方がおられるに違いない。そうなのだ、いのちの酒は、そのように心して飲むべきものだとしみじみ想う。

ところで、私なんかより遥かに酒豪ぞろいの蔵人たち、造りに集中する間は、ほかの酒類を口にするこゝとまかりならぬ。そのかわり休憩の時間に、蔵の酒ならおかまいなし。寒いから、豪快に一升瓶のまま燗をつけて飲む。

これが実にうまいのだが、わが家に帰っちゃいまだにそれができないでいる、私やヤワな酒豪のままだ……。

ヘメモン吉乃川 0258-3513000
東京支店 03-3834-4081

午後の日差しの中で

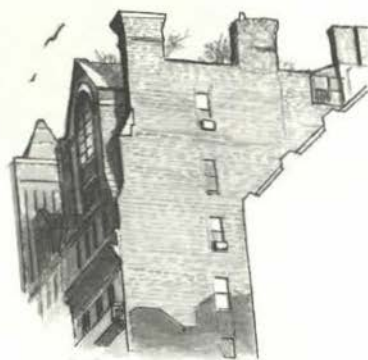
〈第十二回〉

偽善とエゴ

吉川英明

先日の夜、ニュースが終わって、そのままテレビを見ていたら、鷹の子育てのドキュメンタリーが始まった。

ツミという鷹だった。初めて聞く名前の鳥なので、後で辞書を見たら、漢字では「雀鷹」と書いてツミと読ませている。日本で最小の鷹だという。



鷲や鷹などの猛禽類が、棲息地を奪われて次第にその数を減らしている中で、この雀鷹は、町中の神社や公園の、ちょっとした森や林という環境に順応して逞しく繁殖しているという。

ドキュメンタリーは、その産卵から子育ての過程を辛抱強く追いかけた労作で、ぼんやりと見ているうちに思わず引き込まれるほどの出来

だった。

だがそのうち、ある映像に心の奥のどこかを衝かれてぎくつとし、腕を組んでしまった。

親鷹が雛に餌を与える場面だった。

雀鷹の餌は小鳥だから、町中の森に棲めば、主食は自ずから数の多い雀ということになる。

親鷹は、獲って来た雀を両足で大枝の上に押さえ込み、鋭い鉤のような嘴で肉や骨を食いちぎる。その肉を、口を開けて待つ雛たちに口移しに与えるのだ。

押さえ込んだ雀から、強靱な首の筋肉を使って力任せに千切り取った肉片が、親鷹の嘴からだらりと垂れるありさまが異様に生々しく見えた。元気に飛び回っていた雀は、今や小さな檻縋のようにしか見えなくなった。まことに凄惨な映像だった。

だが、私がぎくつとしたのは、その凄惨さ残酷さ故ではなかった。その映像の視点に胸を衝かれたのだ。

そこでは、雀は、鷹の単なる餌としての価値しかない。

こと雀に関しては、小鳥を愛そうとか、野鳥を保護しようとか、今流行のバードウォッチングの世界とは、まったく違った角度からの視点である。

もちろん、それが自然界の法則だから、鷹を話の中心におけば、雀は餌としてしか描かれな
いのは当然だ。

考えてみれば、同じような例は、今までにも散々見てきたはずだった。野生動物の生態、それも、ライオンや虎といった肉食動物を描けば、どんな愛らしい動物も、所詮彼らの餌に過ぎない。

午後の日差しの中で

これは、動物のドキュメンタリーの常道だが、製作者は主役の動物に愛情を注ぐ。

主役の動物の家族の習性や、父親の愛、母親の愛の強さを克明に描き、厳しい環境や外敵に打ち勝って、生まれた子供が一人前に育っていく姿に視聴者の共感と感動を得ようとする。

くだいようだが、そこでは、何カ月、あるいは何年か前、主役のスポットライトを浴びて、我々の感動を誘ったことのある小動物は、単なる餌として殺され食われていく。そして、我々は茶の間に座り、主役と生贄の入れ変わるドラマを平然と娯楽として見ている。

よく考えてみると、これは相当神経が太くなくてはお来ないことではないだろうか。しかし、誰もがそれをそう大変なことだと思っていない。話は動物の世界のことであり、自分の身には直

接関わりがないからだ。

やはり、人間という動物は、その本質において偽善者であり、エゴイストなのだ。

その偽善者ぶりを臆面もなく発揮するのが、テレビというメディアだろう。

鳥や小動物は、見ただけで可愛い。鴨が矢で射貫かれたり、白鳥がバットで殴り殺されたりすれば、普通の神経の持ち主なら、誰だって義憤を感じるのは当然だろう。

だが、テレビ各局のワイドショーが、連日申し合わせたように射られた鴨の取材で競い合ったり、皇居お堀端の軽鴨（かるがも）の雛が、卵から孵（かえ）って道路を渡る映像を撮るため、毎日長時間に渡ってテレビカメラの大放列が出来るなど、どう見てもおかしい現象だ。平和ボケと言われても仕方あるまい。



ここまでやられると、あまりにも偽善の匂いが芬^{ふん}芬^{ふん}として嫌になる。

連日、テレビの画面で、深刻な顔をして鴨の身の上を氣遣っている人々の中に、鴨南蛮や鴨鍋を出されて、鴨がかわいそうだと怒る人がいたらお目に掛かりたい。

動物愛護は結構。大賛成だ。だが、人間が動物愛護を唱える口の裏では、彼らを殺して食べているという事実をいたして、表現にある程度の節度と恥じらいを持って欲しいのだ。

これが、鴨ではなく、鯨やイルカとなると問題はもっと大きくなる。それによって生計を立てている人々の死活に関わるからだ。

もちろん、〃種の保存〃という観点から、十分な調査に基づいた厳しい規制は必要だと思う。ある種の鯨を絶滅させないために、獲るなどい

うのなら話はわかる。

だが、鯨やイルカの保護団体が感情的になつて、それらを生活のために獲る人達を、残酷だと非難するのは当たらない。牛や豚や鶏は、食用のために飼っているのだから、殺しても残酷ではないけれど、自然界の生き物を殺すのは残酷だとする論理は的を外れていると思うのだ。

時として人間は、自らの欲望を満たすために、特殊な動物を育て作り出すことさえ辞さない。

生きるために、自然界の動物を殺すことと、特殊な飼育方法を動物に施して、それを食らうことと、どっちが残酷なのだろう。

柔らかく、見た目にも美しい霜降り肉が出来るようにと、ビールを飲まされ、マッサージを施されて育てられる牛。病的に肥大した肝臓がうまいからと、強制的に太らせられる鶯鳥。大

量の需要に、安く早く対応するために自動飼育装置で育てられ、何と一坪当たり四十羽も詰め込まれて出荷されるというブロイラー。

人間の欲望、それも生きていくうえで最低限の食欲でなく、うまい物を食べたい、または金を得たいという欲望のために、動物本来の生態をねじ曲げたうえで殺すというほうが、ずっと残酷なのではあるまいか。

鯨やイルカを殺すなどデモをする連中が、全員菜食主義者で、肉牛の牧場やブロイラーの工場などに、同じようなデモを掛け、あらゆる動物を殺すな食うなと叫んでいるのだったら、それはそれで筋は通る。

そうでない限り、どうも私には、そうした運動そのものにさえ、偽善の匂いを嗅いでしまうのである。

古い言葉かもしれないが、筋を通すということとは大事なことだ。エゴイズムが頭をもたげるから筋が通らなくなる。

突然、妙なところに話題が飛ぶが、私の住んでいる場所の周囲で、もう数年前から一つの問題がくすぶっている。

ごみ焼却炉建設の問題である。

私が住んでいるのは、駒沢公園の近くなのだが、その駒沢公園に隣接した都立大学の立ち退いた跡地に、東京都のごみ焼却所を建設するという計画が数年前に明らかにされた。それに周辺住民が反対するといふのである。

まあ、こうした問題は、日本全国至る所にあつて、住民パワ―としてはやされたり、反対に住民エゴと非難されたり、毀誉褒貶さまざまだが、こうしたことに反対するにも、やはり筋が

通らないといけないと思ふ。

私は、ごみ焼却所の建設計画について、詳しい説明を受けたわけでもないし、反対する側の……他人事ではなく、私の住んでいる町なのだが……言い分を聞かせて貰ったわけでもない。

だから、軽率なことはあまり言いたくないのだが、もし今の段階で、反対名簿に署名しろと言われたら、私は断る。

焼却所をここへ作らずに、どこへ作ればいいのかというしっかりとした代替案を、私自身持っていないからである。

反対だと言つて、

「じゃ、どうすればいいの？」

と、訊かれた時、

「知らない。どつかあるんじゃない」
では、無責任が過ぎるだろう。



それに多分、私如き素人が調べたところで、東京都内に適当な代替地が見つかるうとは思わない。仮にあったところで、今度はその周辺の住民が、あっちへ行け、と反対するだろう。今の東京に、人が住んでいないところなどありはしないのだ。

東京都にしたって、散々頭を悩まして検討した結果、反対運動の起こることは承知でここに決めたのだろう。要するに専門家が調べて、こしかなかったのだ。

このままだとパンクしそうだとされるほど切迫した首都圏のごみの問題である。我が家でも年間にすれば相当の量を出しているに違いない。他人のところならいいけど、俺のところだけは困る、というのは通らない。

馬鹿に役所の肩を持った、物わかりのよすぎ

る意見だと言われそうだが、私にしても本音を言えば、ごみ焼却所など出来ないほうがいいに決まっている。だが、自分の持論の筋を通そうと思つたら、ここは、すんなり計画を受け入れるほか、私には道はない。

そして、今の科学技術を信じることだ。進んだ排煙処理技術、防臭技術によつて、これ以上空気も汚れないし、匂いもしないということを経験するしかない。それは裏切られないだろうと私は思う。

政治の世界を見渡してみても、政治家個人個人が、これ見よがしに振りかざしている偽善と、うちに隠し秘めているエゴとをかなぐり捨てれば、諸事万端、もう少しスムーズに運ぶと思うのだが。

(作家)

楽屋ゆかた

その三

中村吉之丞(三)

歌舞伎座九月興行夜の部の「引窓」には、二

代目吉之丞襲名披露と銘打ってあった。吉右衛

門の十次兵衛、富十郎の濡髪長五郎、そして、

吉之丞は義理の息子（十次兵衛）と実子（濡髪）

との間に立って苦しむ母お幸で、これは大役だ。

筋書の上演配役記録を見ると、戦後のお幸役者

は先々代宗十郎、多賀之丞、芝鶴、延若、又五

郎といった立派な顔ぶれだし、最近では上方役

者・先代上村吉弥の上品でしつとり情愛のこもる名舞台が強く目に焼きついている。

「引窓」の幕が開いた。吉之丞のお幸は期待通

りのいい出来で、遊女上がりの嫁お早が、何か

につけて「おお笑止」と廊言葉が出るのをたし

なめる件りもきつくはないし、濡髪の絵姿（人相

書）を売ってくれ（つまり見逃してくれ）と十次

兵衛に頼むところも含みのあるいい芝居だった。

関 容子



もちろん濡髪の大前髪を剃り落すお幸の見せ場もいい。

吉之丞を樂屋に訪ねる。歌舞伎座の樂屋は一階が座頭格の大幹部が入る広い部屋、二階が広い大幹部の広い部屋と中堅や若手花形の入る小さな部の部屋、三階は名題の入る四人部屋がいくつかあって、あとは名題下が入るいわゆる大部屋になっている。今回、吉之丞の樂屋は、花道下のすぐ脇の、奈落に一つだけある細長い部屋で（こんなところに樂屋があるのを知らなかった）、錦吾と相部屋だった。出番の遅い錦吾の樂屋入りはまだあとなので、気兼ねなく話ができる。樂屋が花道の揚幕への通り路にあるせいか、まずこんな話が出た。

「中村屋（勘三郎）さんが弁天（小僧）の拵え（扮装）で揚幕の中にいらして、今の幸四郎さ

んが染五郎時分にたしか忠信（利平）で、ご一緒に出を待ってました。あたしはすぐそのそばについていたんですが、中村屋さんのお訊きになるんです。『お前んとこのお父つつあん（白鵲のこと）、うちへ帰って何してんの？ え？ 何にもしゃべんないの？』で、お前さんは？ 黙ってテレビ見て？ あ、つまないだらうねえ』って（笑）」

中村屋のたたみこむような、でもどこことなく愛嬌のある話しぶりを吉之丞がよくとらえている。

私が今見たばかりのお幸を褒めると、謙遜して大きく手を振った。

「先の旦那（初代吉右衛門）には一度も芸を褒められたことがありません。旦那のお宅のそばに部屋を借りて、年中あたしは御用に伺ってま

したが、旦那は機械類が嫌いで、昼寝のときも扇風機じゃなく団扇うちわじゃないといけないんです。で、あたしが旦那をあおいでますと、蠅ハエがブーンと来ましてね、そおーつと立って行って……寝てますからね、旦那が。団扇でパツとやるとシ

ユーツと逃げる。また、抜き足差し足で行って、パツとやるとシユーツと逃げる。そしたら旦那が『おい、おめえは何やらしても、まずいやつだなア……』って(笑)。憎らしい。片目あけてずつと見てたんでしょうね』

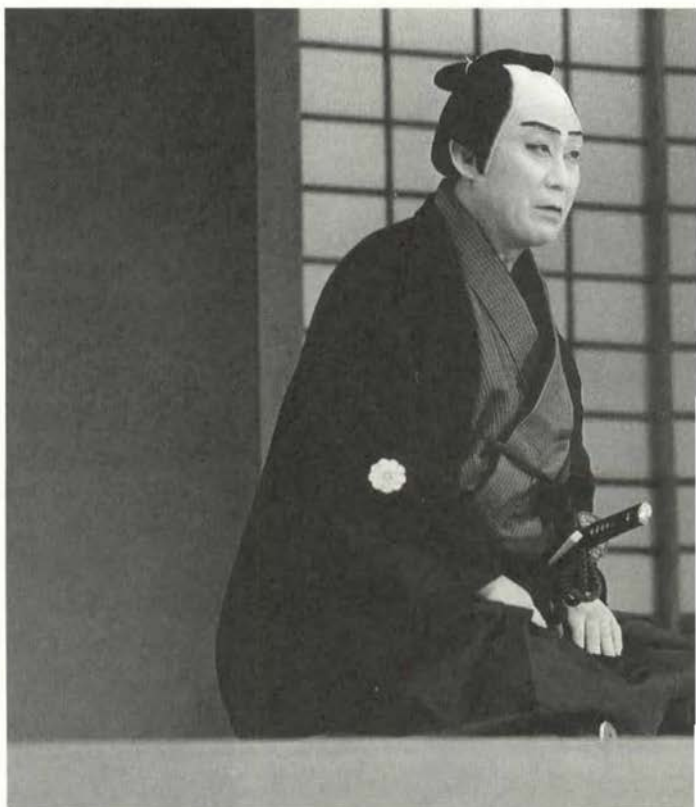


写真提供／松竹写真スタジオ

まるで忠臣蔵七段目の由良之助と仲居そのままだ。「まずいやつだなア……」と、鼻にかかる声の語尾を少しふるわせるので、初代吉右衛門の口跡がまざまざとよみがえる。

「旦那から褒められたことと言えば、炭のつぎ

方くらいですね。日光のお寺に疎開していたとき、旦那は寒がりですから一日中火鉢の炭を真っ赤にしとかなきゃいけない。炭の黒いところが嫌いで赤くしとかなないと気持ちが悪いですね。『おめえは炭つぐのだけはうめえな』と褒めて



二代目吉之丞襲名披露と銘打った「引恋」で吉右衛門(左)演ずる南方十次兵衛の母親役、お幸を演ずる二代目中村吉之丞(右)。

いただきました。あたしは学童疎開から帰ってきて芝居に出てましたから、今度は旦那のお供で日光へ疎開したわけなんです。それで、おか

しなことがありました。夜中に警戒警報になると、旦那は寝巻を脱いでモンペ袴に着換えるわけですね。お寺の長い廊下にはずーっと雨戸を立てて、おまけに黒いカーテンを引いて、そのうえ電灯には黒い布を掛けてあるんですが、まだそれでも明りが外へもれるんでしょう。警防団の人がメガホンで『電気消してください！』って怒鳴るんです。『うん？ 電気消せ？ 何言ってやんでえ、電気消したら着物が着換えられねえ』中で怒ってるんです。するとますます外で怒鳴るでしょ？ すると旦那がさも忌ま忌ましそうに言いました。『おい、おれは中村吉右衛門だ！』(笑) ね、おかしいでしょ。吉右衛

門と言ったって、戦争なんだから通用しやしませんよ。子供ごころに何だかおかしいなアと思いましたですよ」

初代吉右衛門は、日光へ疎開する前は牛込の若宮町にいた。そのころ吉之丞は「二代目の旦那(現吉右衛門)をおんぶしたり、今の幸四郎さんを行季に乗せて廊下で押して遊んだ」りしたこともあるという。空襲になると初代吉右衛門は「坊ちゃん(現吉右衛門)を抱いてお庭の防空壕に入って、三十分が一時間でも清正公様(掛け物)飾って南無妙法蓮華經」を唱え続けていたという。そう言えば戦後だいぶ経ってどこかの巡業先へ初めて飛行機で行ったとき、初代吉右衛門は着陸するまで機内ですっと南無妙法蓮華經を唱えていた、と藤間正子^{せいこ}さん(初代吉右衛門長女)から聞いたことがあった。

「終戦直後の巡業にはひどい苦勞がありました。何しろ機関車の煙突にまで人がしがみついて買出し部隊が行くころの話です。石炭の積んである無蓋の貨車にもみんな人が乗ってました。そんなとき水戸へ芝居やりに行くことになって、朝行つて乗り打ち（移動日に公演する）です。

それでも上野駅で便宜をはかつてくれて、劇団の人は先に改札して、みんなが乗ったら一般改札をする、つてことでした。それであたしはリュックサック背負つて旦那のトランクを持つてホームの一番前に並んでました。そしたら汽車が日暮里のほうから逆に入ってきたんですよ。カタンカタンと、バカにゆつくり。ふと見ると、まだ来ないはずの一般のお客が、雲霞のごとく押し寄せてくるじゃありませんか。見る間にワーツとなだれこんできて、もう方々一杯の人なん

です。それであたしなんか押されちゃつて……汽車が止まらないのにみんな飛び乗るんで、どんどん押されて汽車にピタッとくっついて身動きがとれません。それでも汽車は走るから、グルグル身体が回っちゃうんですよ。だから連結へ来たらストンと落っこっちゃったんです。あたくしが、で、持つてた旦那のトランクおっぱり出して、汽車の樋にこうつかまつたんです。でもまだカタンカタンカタンカタン走つてんでしょ。それでもうズルズルズルズル。とにかくリュックサック背負つてますからだんだん下へさがつて足が上になっちゃうんです。ああなると声が出ません。ほんとに驚くと声が出ないつて言うけど、そうですね。キヤーとも助けてとも言えません。もうダメだダメだ、つてただそれだけ。とうとうドスンと線路の砂利道に落つ

こちた。ああ轢かれちゃう……って観念したら、
そのとき汽車がギイーツ、と音を立てて、止ま
ったんです」

よかった。久々に手に汗を握る思いで人の話
を聞いた。吉之丞の話術はうまいものだ。

「汽車が止まって我に返ったら、ホームは人で

一杯で上がりません。あれ、旦那のトランクは、
と気がつく、はるか彼方にホームと汽車の間
にはさまってるのが見えました。それで汽車の
下をくぐって反対側に出たら駅員さんがいて、
どうしたんだ、って言われて。やっとホームに
上げてもらって荷物のほうへ行って見たら、ど



花道の真下にある楽屋での二代目吉之丞。

こかの親父さんが一生懸命トランクを引っぱってる(笑)。でもいい具合にはさまってて、取れないですね。で、駅員さんが一たん下へ落として、汽車が出たあとで棒ですくって取ってくれました。あのトランク、今もあればきつとどこか傷になってるはずですよ」

初代吉右衛門夫妻は弟子の少年がそんなひどい目に会っていたことも知らないで、怒って家へ帰ってしまった。吉之丞は来る汽車来る汽車を見送って、ようやく最終列車、しかも客車でなく貨車に乗りこむことができたという。

「高麗屋の男衆さんが車掌さんに事情を話して内緒で貨車に乗せてもらったんです。でも、貨車というのは床がスノコで、お尻が痛いもので

すね。それで何の気なしにふつと見たら、車掌室に先代の旦那が奥さんと頭取と三人で、苦虫噛みつぶしたような顔で乗ってました(笑)。それから考えると今の巡業は天国みたいなものですよ」

それにしても、吉之丞のこの奈落の楽屋は面白い。花道を走る足音が頭の上からよく聞こえる。「引窓」の次の「かさね」の幕が今降りかけていて、富十郎のかさねに引き戻される吉右衛門の与右衛門が、もがき苦しみながらバタバタと花道の上を行きつ戻りつ駆けているのだ。音のするほうを見上げると、吉之丞はにっこりして、会釈しながらこう言った。

「では、旦那にお疲れさまの挨拶に参りますので、今日は失礼致します」 (エッセイスト)



現代の快僧その十

天台宗 宗務総長

杉谷義純さん

世界の宗教が 出会うとき

取材・文 稲葉小太郎

それは歴史的な瞬間だった。一九八七年八月四日午後三時三十分。比叡山延暦寺の大梵鐘が鳴り響くと同時に、ローマ教皇庁の鐘が、英国



すぎたに・ぎじゆん●一九四二年東京都生まれ。慶応義塾大学法学部法律学科卒。大正大学大学院博士課程修了。七五年天台宗宗務会議員に。その後宗務会議長を経て93年12月天台宗宗務総長に。寛永寺円珠院住職。著書に『最澄と天台仏教』（共著）がある。

カンタベリーの鐘が鳴った。

比叡山山頂の特設ステージの上に、中国仏教協会会長ら海外の仏教者五人が立ち、数珠を手に経文を唱える。続いてキリスト教、イスラム教、ユダヤ教、ヒンドウ教、シク教、儒教などさまざまな宗教の代表が代わる代わる壇上に登り、それぞれの服装と作法で「世界平和」のための祈りをささげた。

海外の宗教者だけではない。日本からは仏教、神道、キリスト教、新宗教の代表がそれぞれ祈りをあげた。

インドでは流血の抗争を展開しているヒンドウ教代表とシク教代表が抱き合っている。パチカン代表とユダヤ教のラビが握手している。

仏教の僧侶と神道の宮司と新宗教の代表が歓談している。

世界中のさまざまな国のさまざまな民族の宗

教の代表者たちが集まって、平和のために祈る。

「世界宗教者平和の祈り」は、比叡山開創千二百年の年に行なわれた「比叡山宗教サミット」のハイライトだった。

この感動的な場面が繰り広げられる舞台の裏で、感激するというよりもむしろ、ほっと息をついている人物がいた。「比叡山宗教サミット」の開催のために奔走したサミット事務局長の杉谷義純さんだ。

今回ご登場いただくのは、この杉谷義純さん。上野円珠院の住職で、現在は天台宗の宗務総長の要職にある。

最年少の宗務総長

天台宗といえど日本仏教史上でも別格の存在だ。伝教大師最澄は弘法大師空海と並ぶ平安仏教の巨星であり、最澄が開いた比叡山延暦寺は

日本仏教の最高峰。浄土宗の法然も浄土真宗の親鸞も、臨済宗の栄西も曹洞宗の道元も比叡山で学んだ。日蓮だって比叡山に登っている。今の日本の仏教の流れは、ほとんどが比叡山に発しているといっていだろう。

ところが現代における天台宗のイメージはどうだろうか。失礼ながら、インパクトが強いとはいえない。長く天台座主をつとめた山田恵諦座主のことはみな知っているし、千日回峰という信じられないほどの荒行をなしたげた行者さんが何人もいるのは有名だ。でも天台宗の教えがどんなものなのか、現代の社会においてどんな活動をしているのか、天台宗のお坊さんたちはなにを考えているのか。そういったことが伝わってこないのも事実。ぼくがある仏教雑誌の編集者に天台宗の面白いお坊さんはいないかと尋ねたときも、

「偉いお坊さんならいるんだけどねえ……」
という返事だった。

ところが。

ここ一年くらい、あれっ天台宗がこんなことやっている、と思うニュースが目につくようになった。たとえば九二年には「天台宗が仏教以外の専門知識を持つ住職で脳死などのシンクタンク作り」という記事。九三年の毎日新聞大阪版には「天台宗が僧侶公募」の記事。九四年の毎日新聞には「仏典をデータベース化 比叡山延暦寺の天台宗典籍編纂所」パソコン法師「募集始める」と出ていた。

天台宗の中でのなにかが動きつつあるのだろうか。そんなふうに考えているとき、杉谷義純さんのことを知った。

杉谷さんは昭和十七年生まれ。五十二歳という若さで天台宗務総長の職にある。

歴史のある天台宗の、最年少の宗務総長。このギャップは面白いと思い、上野寛永寺の近くにある円珠院にお伺いした。

それまで天台宗のお坊さんには会ったことがなかったの、ぼく自身、正直言って少し緊張していた。ところが実際にお会いした杉谷さんはとても気さくなひとだった。たしかに姿勢がビシッとしているし、品が感じられる。でもそれがなんとも自然なのだ。五十歳で宗務総長というのは最高のエリートコースと考えるが、実際には、仏教の道に進むかどうか悩んだ時期もあったらしい。

母の菩提を誰が弔うか

円珠院は上野寛永寺の子院のひとつで、杉谷さんは三十六代目の住職だ。江戸時代からずっと檀家は毛利家のみだったが、戦後は寛永寺の

中に墓所を設け、ふつうの檀家寺になった。

この場所に戦争中の昭和十七年、杉谷義純さんは生まれた。幸い東京大空襲のときも円珠院は焼け残った。戦後の物の無い時代はあったが、すすくと成長したようだ。

上野中学から、高校は都立の上野高校へ進学。そのころは寺を継いで僧侶になる気持ちはない、つたという。

「親の姿を見てみると、いろいろ見えてしまうものがあるでしょう。いいときもあれば、大変さが報われないときもある。坊さんってマイナーな仕事だなあと思ってしまったんです」

大学は慶応義塾大学の法学部へと進学。

ところが大学に入った年に京都の母方の祖父の家に遊びに行ったときのこと。京都見物を終えて帰るときになって、将来の進路のことが及んだ。



比叡山延暦寺での宗教サミット前年、ローマ教皇庁でヨハネ・パウロⅡ世に招待状を手渡した杉谷さん(左)。

「法学部に受かったことだし、法律の専門家になりたい」

杉谷さんが言うとき、祖父は、

「そうか、あんたが坊さんにならな
いんだったら、お母さんの菩提は誰
が弔うんだい」

実は杉谷さんは実母と六歳のとき
に死に別れている。ずっと小さいこ
ろの記憶しかないだけに、ほのかな
憧れのようなものがあつたのだろう。
さりげないひと言が突き刺さった。
思わず、

「お経、覚えればいいんでしょ」と
と答えていた。家に帰ってみたら、
どうだろう。修行先も決まり、旅の
準備もしてあつた。どうも父と祖父
は裏で話し合っていたらしい。しか

し今さらあとには引けず、比叡山へと修行に行くことになる。

仏教の知識はほとんどなかった。「般若心経」もつかえるくらいである。それでも修行をしながら考えた末、東京へ帰ったらお坊さんになろうと考えるようになった。

ベトナム戦争の現実に接して

杉谷さんを語るとき、仏教青年会活動はずすことはできない。大学の二年生のとき慶応義塾大学仏教青年会に入会。ほとんど在家のひとの集まりなのだが、福沢諭吉がキリスト教青年会と同時につくった歴史のあるサークルだ。それまでは仏教を毛嫌いしていたのが、この道でやると決めたら、意思は固い。仏教一筋にかけると決心で青年会活動に全力を注いだ。

一九六五年、ベトナム戦争の真つ最中にサイ

ゴンにおいて仏教青年会議が開かれる。杉谷さんは、日本の学生代表としてサイゴンへ向かった。

空港には戦車がずらりと並び、いかにも厳重な警戒。案内されたホテルは爆撃を受けて四階から上^が吹き飛ばされている。昼間は戦闘はないけれど、夜になると鉄砲の音が聞こえてくる。こりやあ大変なところに来たなあと思った。

主催者に関するいろいろな噂はあったが、ベトナムの仏教界を支援する決議がなされ、会議は無事終わった。

さて、せっかくベトナムまで来たんだから、アンコール・ワットを見物しようと計画していたのだが、飛行機に荷物まで積んだのに、なぜか乗せてくれない。

次のバンコク行きの飛行機が四日後。たまたまNHKが取材に来ていたので相談すると、若

い宗教家がベトナムの惨状を見ておくのはいいことだといって車を出してくれ、郊外にある難民キャンプの視察に行った。

翌日はベトナムの学生リーダーに会うのだが、警察が狙っているので直接会うことはできない。まるでスパイ映画みたいに、車を乗り継ぎながら連絡をとり、なんとか話を聞くことができた。こうした体験を経て、この世界の現実に向かうためには、青年仏教徒は超宗派で団結しなければいけないと確信する。

まずベトナムの報告会を兼ねて青年僧侶を集め、東京天台仏教青年会の創設を提案。近隣の参加者はそれぞれ自分の地域に帰って組織を作り、やがて天台仏教青年連盟という全国組織ができる。杉谷さんは、その初代の代表に選ばれる。青年会での活動は、托鉢で街頭に立ったり、声明など仏教音楽を一般のひとに知ってもらう

などの啓蒙活動が中心。

「一般のひとびとと接点を持つとう」

それが目的だった。托鉢もお金のためではなくて、僧侶が街に出て歩いているという姿を見せるのが大切だと思ってた。

その後は全日本仏教青年会の理事長も勤める。

しかし青年会を作って宗の活性化を要求しても実際には中央の腰は重い。一番大きかったのは海外の布教所の問題。ほかの宗派にはそれぞれ海外の拠点があつて、そこを基盤に海外で学んできた若手仏教者が華々しい活躍をみせていた。そこで天台宗でも天台宗海外伝道事業団を作るべく働きかけた。自分のかねえられなかった夢を次代に託そうとしたわけだが、宗のほうではなかなか補助金も出してくれない。

「やはり、若手の意見を宗に反映させるためには、宗議会に出なければだめなのか」

七五年、青年会をやめた杉谷さんは宗議会選挙に出馬し、初当選。三十二歳のときのことだ。それから何期か議員を続けていくうちに、だんだん責任も重くなって宗議会議長も勤める。九四年十一月には、前任者の任期満了にともなう選挙において、無投票で宗務総長に選ばれた。

憎しみを超えて

杉谷さんが、特に力を入れてきたのが海外の宗教者との対話。それはのちに、冒頭の比叡山宗教サミットとして結実する。

宗教サミットのアイデアは、期せずしていろんなひとが考えていた。たとえば杉谷さんが青年会活動をしているとき可愛がってくれた葉上照澄さん。千日回峰の行者さんなのだが、世界連邦の構想を持ち、キリスト教、イスラム教も

含めた宗教者が連携しなければいけないと考えていた。

もうひとつは立正佼成会会長の庭野日敬さんが提唱した世界宗教者平和会議。こちらは現場の宗教者たちの草の根的な運動だ。

草の根運動的にコツコツやることももちろん大事だけれど、ある時点で責任者がお互いに一緒に祈る姿を見せることが信者さんには大きい。宗教サミットの意義はそこにある。

宗教者の交流というと、簡単そうに見えて実は多くの問題がある。

たとえばそれぞれの宗教はそれぞれの真理を持つている。それがいざ一緒にになにかをやるうというときになると、どちらが上に座るか、どちらが先にやるかで優劣をつけようとする。

日本仏教の中においてさえも、驚くことだが、実は共通の經典はひとつもないのだ。「般若心



1978年8月4日、比叡山延暦寺で開催された「比叡山宗教サミット」。

「経」は浄土系教団は詠まないし、南無阿弥陀仏といえど蓮宗が反発する。

では天台宗ではどうなのか。伝教大師が天台宗を開くときの言葉に、

「一目の羅、鳥を得るにあたわず。一両の宗何そ普く汲むに足らん」

というものがある。ひとつの網の目では鳥は取れないように、ひとつの宗派ではすべてのひとの悩みを解決することはできないという意味だ。「信仰の純粹性を保つとなればこたわりもしようがないでしょうが、もうすこし広く見て、存在しているものは意味があるんだと認めていくことが必要でしょう」

宗教協力の難しさ

一九七八年七月ローマ近郊のネミ湖畔の修道院で日本・バチカン宗教者会議が開かれた。神

社本庁の徳川宗敬統理、仏教は葉上照澄さん、立正佼成会理事長の長沼基之さんらとともに秘書長として参加した杉谷さんは、バチカン代表と起居をともし、話し合いを持った。

その成果を受けて八十年、今度は東京で「世界宗教者倫理会議」という国際会議を開く。杉谷さんは事務局長として、開催に向けての実務を担当した。

「そのときに日本の宗教はどういう流れになっているのか、どこにポイントがあるのか、勉強になりました」

その教訓は宗教サミットに生かされる。たとえば準備会の名称を「日本宗教者代表会議」と決めるために、なんと一年間かかった。しかし、そこで徹底的に議論したからこそ、いったんまとまったあとは磐石の体制ができていきなり、当日までは一直線に突き進むことができた。

比叡山宗教サミットは世界十六カ国から二十四人の代表を迎え、日本からは約五百人が参加し、成功のうちに幕を閉じた。

あの二日間の、感想は？

「ああよかった、やっとこれで無事終わったという安堵感のほうが強かったですね。なにしろ来るはずのアメリカインディアン代表が、ビザの関係で来日できなくなったり、ほんとうに顔を見るまではわからない。切り回し役の悲しさですよ」

むしろ終わって何日かたってから、よかったなあという感慨があったという。

宗教サミット当日の八月四日は「平和の日」と定めて、国内の諸宗教の代表が集まることにしている。十周年にはまた世界の代表を招く予定だ。

それまでは宗教間の対話といっても、よくい

えば一部の進歩派、悪く言えば物好きが集まっ
てやっているというイメージだったが、各宗教
とも門戸が開かれてきたようだ。

杉谷さんのお話をお伺いしていると、人間が
好き、ひととひとを結びつけるのが好きなんだ
なあと思う。

「仏教の教えは人格を通じてひとに伝わってい
くものでしょう。だから、すべての基本は人間
同志の出会いにあると思うんです。そういう意
味ではサミットはトップはトップの出会い、事
務レベルはその出会いがあつてよかったと思
います」

社会に向かって発言を

宗務総長になって一年。ずいぶんいろいろな
ことがあつた。二月には二十年間も天台座主を
つとめた山田恵諦さんが九十八歳で亡くなった。

宗教サミットに向けて常に山田座主の近くに
いた杉谷さんが喪主・葬儀委員長を務めた。

「因縁ですね。亡くなられるときに総長に出
てきたというの。座主が歩かれた範囲も知って
いますから、最後にお別れをしたいひとにはお
知らせすることができました」

イベントも多かった。慈覚大師円仁のご生誕
千二百年の法要があつたし、十月二十二日には
比叡山根本中堂創建千二百年を記念して、千二
百年ぶりに奈良の南都七大寺を迎えて合同法要
を行なった。

「教団の責任者として社会的な発言も、積極的
にしていきたいですね。天台宗はこう考えてい
ますよ、ということと判断基準にしていただ
きたいと思います」

たとえば、天台宗の「脳死と臓器移植に関する
特別委員会」は今年中には結論を出す予定だ。死

刑廃止の問題についても専門委員会も作る予定。
「最近、仏教界の中には、比叡山がまたなにか



自坊の上野桜木にある円珠院でくつろぐ杉谷さん。

言っているなあという空気があるんじゃないですか。マスコミにも、比叡山は目が離せませんよと言っているんです」

杉谷さんの半生には、常に現状に対する間いかけがあった。六十年安保のときに高校二年生で、デモに参加。日本はこれじゃあいけないんだという危機感があった。僧侶になったときは既成仏教はこのままでいいのかと思って青年運動を展開し、宗派に帰ってきたときは宗そのものの活性化を進めてきた。

「古い友達と会うと、笑うんです。昔と同じことをやってる。なんにも進歩がないって」

しかし、ふと気がつくとき自分が最も責任が重い立場になっている。

「正直いうと偉いことだなあと 생각합니다。頑固なひとがいてそれを直すというほうがよっぽど楽ですねえ」

念仏信仰の系譜

中國編

須藤隆仙

5

道綽禪師の弟子たち

前回述べました道綽^{だく}禪師からは、念仏篤信のお弟子たちが輩出しました。その中で最も有名

なのは善導^{ぜんどう}大師ですが、他にも道生^{だうせい}・道誌^{だうし}・道
暉^{だうけい}・道閑^{だうかん}・道如^{だうにょ}といった人たちがおられました。
道撫^{だうぶ}という人もおりますが、この方は弟子とい
うよりは同志といった間柄の人でありました。
道生師は并州晋陽^{へいしゅうしんやう}の人で、道綽禪師の教えに



従って『涅槃經』を学んだのちに浄土の信仰に入り、『観無量寿經』の教えを実践し、七日間で百万遍の念仏を唱えて靈感を得、浄土往生されたと伝えられるお方です。

道諲師は齊州（山東省）歴城の人で、二十八歳のとき道綽禪師にお会いし、その教えに従って『無量寿經』を学び、註釈書四巻を著したそうです。のち大病してますます念仏を唱え、あるとき夢に羽が生えて極楽に行ったことを見、それから十年後に往生されたと伝えられています。道闇師は長安の西明寺に住した方ですが、『観無量寿經』の註釈書二巻を著しており、弥陀、観音・勢至三尊の御絵像を描き、師僧道綽禪師が亡くなると、これを背負って玄中寺に行き、日夜これを礼拝し、禪師のお墓に往生の効験を請い、その靈告を感じて命を終えたと伝えられています。

道如師は道生師と同じ晋陽の人で、一丈六尺の阿弥陀仏の金像を造り、地獄に落ちている人々を救おうと発願しました。そして、いつもこの金像に供養の誠を捧げたのですが、あるとき夢に、閻魔の庁（閻魔大王が亡者の生前の罪を調べる所）に行ったところ、その金像が地獄を照らし、苦しむ亡者を救っているのを見たというのでした。

こうした事例を拝見しますと、道綽禪師の教化がいかに偉大であったかということがわかるのであります。その中で、善導大師の存在というものが、これまた大変なものでありました。以下、善導大師について述べます。

善導大師の出現

善導大師（以下「大師」と記す）の御伝記は

数多くあり、今なお研究書が次々と出されておりますが、諸先生方のこれら研究書に従って総説的なことを述べていただきますと、生まれば隋の大業九年（六一三）、生地は泗州（安徽省）説と臨淄（山東省）説とがありますが、臨淄説をとる学者が多いようです。

大業九年といえ、隋の煬帝の時代で、煬帝は『広辞苑』に、「大運河など土木をしきりに起し、高句麗遠征に失敗、遂に各地の反乱を招き、江都（揚州）でその臣宇文化及らに殺された」とある皇帝です。煬帝が殺されたのは大師六歳の時で、それから時代は唐になるのです。ですから大師は「唐の善導大師」という呼ばれ方をするわけです。日本でいえば大師十歳の時に聖徳太子が亡くなっておられます。法然上人のご出生は長承二年（一一三三）ですから、大師は法然上人より五百二十年前のお方なわけ

す。

朱という姓の家に生まれられたそうですが、幼くして密州というところの明勝法師のもとへ出家されたといい、密州というのは臨淄に近いところだそうです。出家の事由について詳しいことは伝えられておりません。明勝法師は三論宗という学派の方ではないかともいわれますが、近年の研究では否定説もあります。

出家後は『法華経』や『維摩経』などを読誦勉強されたようですが、ある時、西方極楽浄土の絵図（「変相」という）を見て非常に感動され、浄土への信仰に心が傾いていったようでした。

出家して満二十歳になると、出家者として守るべき具足戒というものを受けるのですが、大師はそれ以後ますます念仏信仰が深くなり、妙開律師という方と共に『観無量寿経』を読んで感激し合い、これこそ仏教の目的である生死の



苦を脱する最良の方法であると決心されたというのであります。中国では隋から唐の時代にかけて、この経が盛んに研究されておりましたから、大師がこの経に出会ったのは、ごく自然のことであると、ある学者は言っておられます。また、ある伝記には、大師が『大藏経』（仏教經典全部）を手になかせて抜き出したところ、「観無量寿経」が出てきたので、喜んでこれを信奉したとありますが、これは大師とこの経との深い因縁を神話化した伝であらうともいわれております。

その後、大師は、念仏の先達である故慧遠法師を慕って廬山の地を訪ね、また長安の南にある終南山の悟真寺を訪ね、ここに数年とどまつて、阿弥陀仏や極樂のことを観想する行をされたのであります。それで大師のことを、「終南大師」とも称し上げるのです。

道綽禪師との出会い

やがて大師は、道綽禪師のおられる山西の玄中寺を訪ね、禪師の門に投ずるのであります。ある学者は、それは大師二十六歳から三十三歳頃までの間の出来事だったろうと推定しております。

禪師と大師との間柄について、面白い話が伝えられております。あるとき大師が禪師に「念仏すれば必ず極樂往生ができますか」と聞くと禪師は、「一本の蓮華を仏前に置いて七日間仏に向かつて右回りに歩き（これを行道という）、蓮華が萎れなければ往生できますよ」と答えたので、大師がそのとおりにしたところ、蓮華は萎れませんでした。これを禪師が見て驚き、「私も往生できるかどうか、心を凝らして（三昧と

教化の御事跡

いう)見てくれ」と言いました。そこで大師はそれを行じ、「禪師様には気のつかない障りが三つありますので、それを懺悔されればよいでしょう」と申し上げ、禪師は非常に喜ばれたというのです。これらはいかにも中国的な説話ですが、大師の偉大さを語った話といえましょう。

大師三十三歳のとき、道綽禪師が大往生をされました。そこで大師は玄中寺をあとにされ、帝都長安(現在の西安)へ向かったのであります。

そして、前にちよつとしたことのある悟真寺で布教し、また光明寺という寺でも念仏を広められ、慈恩寺とか実際寺などでも教化の活動をされ、永隆二年(六八一)六十九歳で大往生されたのであります。大師の入寂を、極樂を願うのあまり樹上から捨身往生されたように記す書がありますが、諸学者が説いておりますように、これは誤説です。

大師の教化の御事跡は實に大変なものであります。大師はまず、常に乞食(こじき)をされたのです。乞食とは梵語パインダパーティカの漢訳で、行乞(ぎき)とも訳されるのですが、出家者が僧団の行儀に従つて、在家者から食を乞うことで、中国では托鉢の語で行なわれました。午前に行なうのであつて、生命を支えるに足るだけを受けるのであり、そのために在家者に迷惑をかけるなど、厳しい規律が定められていたのです。釈尊もこれを行ぜられ、仏教教団を支える大切な行でした。大師はこの基礎をきちんとされたのです。粗衣粗食にあまんじ、よく戒律を堅持されました。一切の名利から離れ、「目を挙げて女人を見ず」というのですから、己れを

善導大師十徳

持すること極めて厳格であつたのですが、他に對しては慈愛の情溢るるものがあつたと伝えられております。ただし念仏信仰を誹謗する人には、容赦ない言説で、これを正しておられたやうであります。

『新浄土宗辞典』に、「本願念仏を唱導して倦むことを知らず、身を持つること謹嚴、三十有余年別の寝所もなく、目をあげて女人を見ざる高風は、時の学僧道宣をして讚嘆おく能わざらしめた。阿弥陀經を書写すること十万余卷、浄土の変相（絵図のこと）を描くこと三百余部、導化京師に洽くして帰仰せざるなしという（中略）師かつて仏名を称して口より光明を放ち、このこと天朝に達して、その住寺に光明寺の勅額を賜い、また光明大師という」と記してありますが、実に要領を得た記述だと思ふのであります。

大師がいかによれて偉いお方だったかということについて、法然上人が「善導十徳」ということを述べておられるのであります。その十徳とは、至誠念仏の徳（真心から念仏を唱えられた）、三昧発得の徳（精神統一で仏様を見られた）、光口より出る徳（念仏の一声ごとに口から光明が出た）、師のために疑を決する徳（道綽禪師の疑問を解かれた）、造疏感夢の徳（『観無量寿經』の註釈書を著し、その前後に靈夢を見られた）、化導盛広の徳（大變な教化力で念仏を広められた）、遺身入滅の徳（浄土往生を願つて入滅された）、帝王帰敬の徳（皇帝も尊信した）、遺文放光の徳（滅後、その著書が光を放った）、形像神變の徳（その像が不思議な力を現わした）、などで

あります。これらはごく信仰的な、まったく宗教的な世界での話なのですが、大師が実際に宗教面のみならず世界的な偉人の一人であったということは、今から十年ほど前に、講談社が『人類の知的遺産』という八十巻の叢書を出刊したことがあるのです。これは、古代イスラエルの思想家から始めて、現代の社会学者・自然科学者に至る多くの群像を浮き彫りにし、その思想業績を紹介したすばらしい企画のものですが、なんとその十八巻は善導大師の巻なのであります。仏教界から選ばれているのは、釈迦・龍樹・世親・達磨と善導大師だけであります。よって大師がいかに偉い方であったかが、いっそう明確化されるのであります。この巻は北海道大学教授藤田宏達博士が執筆しておられ、非常に貴重な論述で、拙稿もこの書に負うところが多いのです。

大師はお念仏を広めるために絵までお描きに

なっていることは前述しましたが、この他にも、後述のようにお念仏の讃歌をたくさんお作りになされました。今日という視聴覚教育の先駆者といつてよいであります。ですから法然上人は、善導大師はこれはもうただのお方ではない、「阿弥陀仏の化身」、つまり阿弥陀如来様が人間となつてこの世にお現われになられたものと仰せられているのであります。事実、法然上人は夢の中で大師に会われるのですが、そのときの大師のお姿は、下半身が金色だったということです。金色は仏様の色であります。

著述と教へ

善導大師には五部の著述がありました。『観無量寿経疏』四巻、『法事讃』二巻、『観念法門』一卷、『往生礼讃』一卷、『般舟讃』一卷

などで、合すると九卷ですから「五部九卷」と呼ばれております。『観無量寿経疏』の疏とは註釈書のことです。この経はそれ以前にもいろいろな方が註釈書を書いておられ、大師在世當時もこれを論ずる方がおられました。大師はこれら古い註釈や今の解釈論などの是非を正し定めてこの書を著されたので、「今この観経の要義を出して古今を楷定せんと欲す」と明記されました。観経は観無量寿経の略称、楷は「正しい手本」、定は「決定」の意です。ですからこの書は「古今楷定の書」として尊ばれるのです。次の『法事讃』は、『阿弥陀経』を誦誦しながら仏のまわりを歩く儀式の讃歌であり、『観念法門』は、観仏や念仏についての三昧と懺悔・発願などを説き、『往生礼讃』は『本時礼讃』ともいって、日没・初夜・中夜・後夜・晨朝・日中の六時に弥陀仏を拝し、往生を願う讃歌と

法を説いたもの、『般舟讃』は、諸仏が面前に現われること（これを般舟という）を願う行ずるための讃文であります。これらの中に大師の教えがことごとく尽くされているのであります。

大師は、浄土念仏の教えを、教義的に組織立ててくださいました。それは安心（信心）と起行（実践行）と作業（信仰態度）とであります。安心は、至誠心（真心こめて）・深心（凡夫の私を阿弥陀仏は必ず救ってくださると深く信ずる）・廻向発願心（一切の信心行を廻向けて浄土往生を願う）の三心が教えられ、起行は、仏や経への誦誦・観察・礼拝・称名・讃歎供養の五種正行が教えられ、作業は、恭敬修（うやまい）・無余修（弥陀信仰に専念する）・無間修（休みなく続ける）・長時修（一生涯続ける）などの四修が教えられております。

（函館・稱名寺住職）

「インフォームド・コンセント」というけれど

中村 尚

＊

最近・新聞紙上などで頻繁に目にする言葉に「インフォームド・コンセント」という言葉がある。医療の新しいコンセプトとして今や一種の流行語のように流通しているが、どうももう一つピンとこないというのが正直なところだ。

第一このカタカナ言葉には、普通私達が日常使っている日本語、特に漢字の持つイメージ喚

起力というものがない。そのためひどく抽象的、平板に映るのだろう。

もともとは法理上の概念語だというから当たり前といえば当たり前なのだが、ではいったいどういう意味、いかなる概念を表す言葉なのだろうか。

『医療の倫理』を書いた倫理学者、星野一正氏は同著の中でこう要約している。

「患者には、医師から、自分の病名や病状を知らされることはもちろん、必要な検査についても説明を受け、また効果が期待されるいくつか



の治療法について、それらの利点と欠点、期待される効果と起こりうる危険性や予後の見込みなどの説明を受けたうえで選択肢を与えられ、患者自身で比較検討できるだけの情報を提供される『真実を知る権利』がある。それに対し医師には、患者が理解し納得できるように『説明する義務』がある。インフォームド・コンセントの法理では、患者―医師の関係はこのようにまず法的な権利・義務の関係にあり、医療契約の関係とされている」

日本語ではこれを「説明と同意」「説明を受けたうえでの同意」あるいは「十分な説明を受けたうえでの患者本人による同意」などと訳すことが多いが、要するに、医師には病名、病状はもちろんのこと、考えられる検査・治療の有効性や危険性、副作用あるいは予後などについて詳細に説明する義務があり、患者には提示さ

れた検査や治療を自らの意思で選択する権利があるというのである。

これだけを聞けばまったく文句のつけようがないが、しかしわが国では「これはあくまで理念の域を出ないのであって、現実ではない」という反論を退けるのはなかなか難しい。

しかも、欧米でこの言葉が定着したのには深い理由があるらしい。第二次大戦中、ナチスドイツが驚くべき冷静さで断行した敵国捕虜の人体実験、あの大量虐殺への苦い反省が根底にあると聞くからである。これが有名な「ニュールンベルク倫理綱領」となり、やがて医の倫理の原点ともいわれる世界医師会総会の「ヘルシンキ宣言」へと熟成していったのだが、わが国の、たとえば旧満州石井部隊、通称七三一部隊の残虐行為がどこかで一度でも裁かれたとは聞かない。九州大学医学部の生体解剖事件も有名だが、

これとてきちんとした処罰や反省があったとはいえないのだ。「インフォームド・コンセント」と聞いても、どこか上ずる感じが免れないのは、こうした無反省、日本特有の戦後医療の内実も絡んでいそうだが、ここではこれ以上深入りするのはやめよう。

とにかく誰もが口を揃えるほど重要だとされる「インフォームド・コンセント」だが。

*

皮膚病の一つである帯状疱疹の特効薬として「ソリブジン」なる新薬が市場に出たのは昨年九月三日。ところが発売後わずか一カ月の間に十六人もの死者が出た。すべて乳がんや胃がんなどのがん患者だが、5FU（フルオロウラシル系）という抗がん剤との併用がもたらした副作用死だという。

しかも、発売前の治験、つまり臨床試験の段階

で、すでに三人ものがん患者が副作用死を遂げていたことも新聞等の報道でご存じのとおりだ。

短期間でのあまりの死者の多さに驚くばかりだが、しかしここで問題にしたいのは、死者の数ではない。一人一人の死者の無念を推し量ることもない。

事ここに至った患者達の沈黙の中身、つまりこの薬を服用して死んだ患者達は「こういうことも起こり得る」危険性をどこまで知っていたか、あるいは知らされていたかだ。

むしろ自分が確実に死ぬと知っていて飲むことを承知する人などいるはずはない。とすれば何をどの程度知らされていたのか。あるいは何か一つ知らされていなかったのだろうか。

第一、薬がまだ公に認知されていない治験段階で、いったいいかなる説明、どういう手続きを経て「服用の同意」が得られたのか。つま

り、いうところの「インフォームド・コンセント」は十分に行なわれていたのかどうか。

——ここに、ある新聞のアンケート調査がある。この新薬の治験に参加した治験担当医三十一人を対象に、薬の服用について患者にどういう方法で同意を得たかを尋ねたものだ。それによれば、回答のあった十六人の医者のうち、説明の上、文書で同意をとった医者はたった一人、回答を保留(?)した二人を除く十三人は、何と口頭での説明と同意のみでよしとしたという。「文書で同意をとることは患者に心理的な圧迫を与える」「日本では文書で契約することに慣れていない」などがその理由と聞いて暗然たる想いにとらわれたのは、私一人だけではない。臨床試験とは、いまだ未知の部分の多い新薬を実際に患者に投与し、その安全性や有効性を確認するためのものだ。つまり、人体を使った

薬物実験以外の何物でもない。

であるからには、心理的圧迫がどうの、慣れていないなどで済む話ではない。意識あるもの、意思あるものが、その有効性も毒性も、あるいはもしかして起こるかもしれない致死的な副作用も十二分に知悉したうえで、自らの意思で選べば同意したうえでなければ行なつてはならないはずのものだ。

死を引き換えにしなければならないような危険な実験が、きちんとした同意文書もなしに、かくも安易に行なわれるとはほとんど信じがたい。当然、熟考と選択の余地を残す「十分な説明」があつたとも思えない。実際その形跡すら明らかにされてはいないのだ。

ということとは、先に触れた世界医師会総会での「ヘルシンキ宣言」、つまり「ヒトにおける生物医学的研究に携わる医師のための勧告」さえ

守られていなかったということだろう。しかも一九六四年に採択されたこの宣言は、十一年後の東京総会で一度改訂されたという経緯がある。

そこにははつきりこういふ一文が記載されている。くどくなるのを承知で引いておく。

「一、基本原則九 ヒトにおける研究においては、被験者となる人は、その研究の目的、方法、予想される利益と、研究がもたらすかもしれない危険性、および不快さについて十分知らされなければならぬ。被験者となる人は、この研究に参加しない自由をもち、参加していても、いつでもその同意を撤回する自由があることを知らされなければならない。その次に医師は、被験者の自由意思によるインフォームド・コンセント（内容を知らされたうえで研究または治療についての同意）を、できれば（口頭ではなく）書面で入手すべきである」

もちろん、わが国にも治験制度らしきものがないわけではない。四年前ようやくにして実施に移された「医薬品の臨床試験の実施に関する基準（GCP）」がそれだ。そこでは被験者の人権保護が謳われ、「被験者の自由意思による同意」の文言も遺漏なく盛られてはいる。

しかし験者たる医師が記録に残しておきさえすれば「口頭による同意」でも差し支えないとするこの基準は、あまりに日本的、曖昧に過ぎるとの謗りを免れまい。第三者の保証がないのだから、疑えば「記録などどうにでもできる」はずのものだからだ。

しかも欧米ではルチンとされている「治験が実験であることの言明」と「治験実施計画の詳細を示す文書への被験者の署名」も義務づけられてはいない。いわんや「賠償に関する説明」も、「損失」を被った場合の責任者についての言

明などどこを探しても見当たるはずもない。これはいったいかなる意図によるものなのか。

口を開けば猫も杓子も国際化をいう昨今だが、こうした肝心要のところは欠落したままでの国際化では、にわかには信じがたいのも当然だろう。

*

お寒いかぎりとはいえ、これが紛れもない私達の現実なのだが、今、言挙げが盛んな「インフォームド・コンセント」、「十分な説明を受けたうえで患者本人による同意」が果たしてどこまで根付き得るのか甚だ心許ない限りではある。

「同意」といい、あるいは「選択」といい、確かにこれまでの日本の医療の中では表立つことの少なかった言葉だ。同意もくそもない、選択などもってのほか、「偉い先生にお任せするしかない」というのが医療への関わり方の大方のスタンスだったからだ。

私達は偉い先生に自分の体を預けてしまふことによつて、いわば「選ぶこと」を放棄し、この放棄の無責任をむしろ心地よいとしてきた国民である。医師の權威主義、パターナリズムをあげつらうのは簡単だが、患者たる私達自身の弱さへの退却ぐせも、もうこの辺で返上すべきではないか。主張することなしに、あるいは何の衝突もなしに利益にだけ与^{あづ}かうとするのは、経済行為としてもフェアではない。

日本文化には、権利・義務、契約といった冷たい欧米的合理主義はそぐわないのだから、日本独自の「合意」の形を作るべきだという、相変わらずの声もないではない。

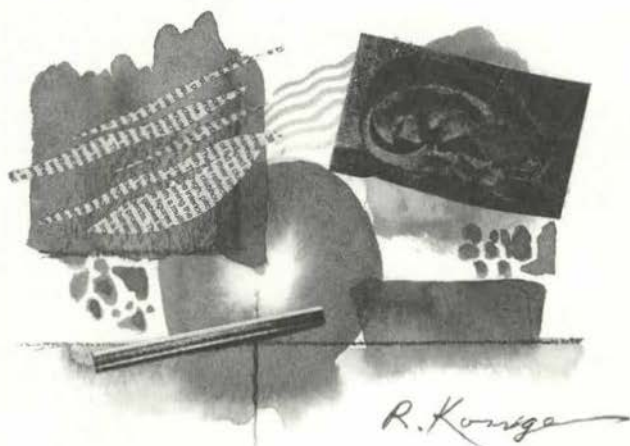
また、個人主義が熟していないわが国のような島国では調和と暖かい人間関係こそが第一、義務や権利を声高にいいたてるのは大人気ないと風潮も相変わらずだ。

だが、もうそんな呑気なことをいつてはいられまい。事は私達の命、私達の体のことだ。私達の命や体が私達自身のものであるからには、どういう危険、どういう不利益が降りかかるかも知らずに一滴の薬も飲むことなどできるはずはないのだから。

しかしそれも難しいというなら、いつそのころ考えたらどうだろう。極論は承知だが、私達は医療というソフトを買う消費者だ。車を買う時のように、あるいは一着のスーツを、一足の靴を買う時のように、医者^{いしや}の指し示すいくつかのオプションの中から時に手術を、時に薬を買うのだと。

買うからには中身の善し悪し、欠陥の有無を確認するのは当たり前だろう。当然疑問があれば質^たし、わからなければ納得のいくまで聞き返すしかない。

むろん医療には車やスーツのような形もなく
摩耗もない。だからそれなりの慎重さと知的準
備は必要だが、時には買い替える勇氣も必要だ



ろう。

いうまでもなく医者がおかしいと詰め寄るだけでは医療は変わるまい。だから私達市井の者こそが声をあげ、まずは身近な日常診療の中で事あるごとに医者達に質問し続けることだ。煩がられてもいい、飽きずに聞き続けることだ。

そしてまずは「自分が飲む薬の名前」くらいはどこにいてもいえるようにしておくことだ。効能も副作用も、飲み合わせの善し悪しも知っていればなおいいだろう。が、せめて『医者からもらった薬がわかる本』の類がいつまでもベストセラーになるような、そんな情けない事態だけは避けたいものだ。

事新たに「インフォームド・コンセント」などといわなくとも、そんなところから何かが変わり始めるはずだ。

(フリーエディター)



●つい先日、昭和十一年の本誌五月号を見る機会を得ました。創刊の翌年に当たりますが、ご存知のとおりこの年の二月には陸軍叛乱将校の事件があったりして、日本が破局へ向かって進む大変な世の中でしたが、しかしわが「浄土」誌を見る限り、まことに泰然たるものがありました。発行人には佐藤密雄師、編集人に真野正順師のお名が連ねられ、宗教相談欄は時の増上寺大島徹水法主が当たられ、連載小説に子母沢寛、短歌欄選者には与謝野品子といった錚々たる顔ぶれが並ぶのにも圧倒されました。以来、約六十年の星霜を重ねて現在の本誌があるわけですが、創刊の初志と伝統をどう貫いていくか、先人の尊い足跡をどのように生かしていくかが今後とも大きな課題となることだけは間違いないと思った次第でした。

●昨年来、「念仏信仰の承譜」をご執筆いただいている須藤隆仙師の九回分が一本にまとまり、「極楽浄土」というタイトルのもとに漢水社（東京都文京区後楽二一八一九）より刊行されました。教化用施本としても利用できますのでおすすめていたします。

●さて、私事でまことに恐縮ですが、この十二月号をもって編集長を辞任す

ることいたしました。思えば昨年の四月号以来、当初の鑽仰会室の開設に多大な尽力を賜わり、また業務の円滑な運営に今も努力を惜しまれない東京教区長大室了暗師や、終始、私の編集方針に協力してくれた編集スタッフの皆さん方、さらにはレイアウトマンとして惜しみなくその才能を発揮してくださった元田朋宏氏をはじめ、文化フオートタイプ、並びに文化カラー印刷の皆さんに深甚なる感謝の意を表します。これで文化グループは私の退陣に伴ってすべてこの雑誌「浄土」から去ることと相成りました。新編集長のもと、新たに製作を担当される印刷所、並びに新グループのご健闘を心よりお祈り申しあげたいと思います。それについても、長い間ご支持を賜わった大方の読者の皆さんにこれまた心より厚くお礼とお別れのご挨拶を申し上げます。長い間、本当にありがとうございました。

(編集チーフ) 小川有順
編集スタッフ 栗田順一
齋藤晃道
長谷川岱潤

編集室

村田洋一
太田正孝
石上俊教

●お知らせ

本誌をまとめて購入希望の方は、一部以上を単位に法然上人鑽仰会までお問い合わせください。頒価その他について詳しくご説明申しあげます。なお、四月号以降の分も残部が少々ございます。

●お願い

本誌「浄土」への投稿は随時受けつけております。ただし、採否に關しては編集部にご一任ください。また、原稿は原則として返却いたしませんので、必要の方は必ずコピーをお取りの上お送りください。なお、採用させていただいた方には規定の稿料を差上いたします。そのほか、ご意見、ご希望がありましたら遠慮なくお寄せください。特に締切日は設けておりません。

編集部

浄土

六十巻 十二月号

頒価六百元
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成六年十一月二十五日

発行 平成六年十二月一日

編集人 宮林昭彦
発行人 牧田諦亮

印刷所 株式会社文化カラー印刷
写真植字 文化フオートタイプ

〒一〇五東京都港区芝公園四七四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(五七八)六九四七
FAX 〇三(五七八)七〇三六



SAPPORO

私たちは味わいライフを追求します。

うまい、うまいで、カロリー半分。 自信作〈カロリーハーフ〉



サッポロ生ビール カロリーハーフ

飲酒は20歳をすぎから

●ご協力をお願い：自動販売機による酒類の販売は、午後11時から午前5時まで停止されています。

サッポロビール株式会社

LIFE TOGETHER



NISSAN

人間のやさしさをクルマに。

スピードおさえて、いい運転。シートベルトをしめましょう。

姿と、かたち。



これが、新しいセドリック

高級車を国産最大の基盤は、その姿とカタチである。
つくり手の強い意志が感じられる姿と、それを忠実に具現化した正統のフォルム。すなわち、カタチである。
まず、姿がいい。カタチがいい。新しいセドリックを見てほしい。

Cedric

日産のかたちを見てください。PHOTO: セドリックV30 ツインカムターボ プロラム

な装備 ●V630DET (V6 ツインカムターボ・総排気量2960cc) エンジン ●最高出力255PS/6000rpm (※NET値) ●最大トルク35.0kgm/3200rpm ●フルレンジ電子制御4速オートマチック(E-AT) (※NET値) とは、エンジンを実際に搭載した状態とは異なる条件下で測定したものです。日産自動車株式会社お客様相談室 ●全国共通フリーダイヤル0120-315-232 お近くのローレル販売会社へ。